



## 牛鍋 (6)

暫くすると、男の箸は一切れの肉を自分の口に運んだ。それはさっき娘の箸の挟もうとした肉であった。

娘の目はまた男の顔に注がれた。その目の中には怨も怒もない。ただ驚がある。

永遠に渴している目には、四本の箸の悲しい競争を見る程の余裕がなかった。



## 牛鍋 (7)

女は最初自分の箸を割って、  
盃洗はいせんの中の猪口ちよくを挟んで男に遣やった。  
箸はそのまま膳の縁に寄せ掛けてある。永遠に渴している目には、  
またこの箸を顧みる程の余裕がない。

娘は驚きの目をいつまで男の顔に注いでいても、食べるとは云って貰もらわれえない。もう好い頃だと思って箸を出すと、その度毎に「そ



## 牛鍋 (8)

りゃあ煮えていねえ」を繰り返される。

驚の目には怨も怒もない。しかし卵から出たばかりの雛に穀物をついで啄ませ、胎を離れたばかりの赤ん坊を何にでも吸い附かせる生活の本能は、驚の目の主にも動く。娘は箸を鍋から引かなくなった。

男のすばしこい箸が肉の一切れを口に運ぶ隙に、娘の箸は突然手



## 牛鍋 (9)

近い肉の一切れを挟んで口に入れた。もうどの肉も好く煮えているのである。

少し煮え過ぎている位である。

男は鋭く切れた二皮目で、死んだ友達の一人娘の顔をちよいと見た。叱りはしないのである。

ただこれからは男のすばしこい箸が一層すばしこくなる。代りのなま生を鍋に運ぶ。運んでは反す。反



## 牛鍋（10）

---

しては食う。

しかし娘も黙って箸を動かす。  
驚の目は、ある目的に向って動く  
活動の目になって、それが暫らく  
も鍋を離れない。

つづく